色鍋島

いろなべしま

文部省特選
芸術祭大賞
教育映画祭文部大臣賞最優秀作品賞
ゴールデンマーキュリー国際映画祭金賞（イタリア）
毎日映画コンクール教育文化映画賞
東京都教育映画祭最優秀賞
昭和四十七（一九七二）年度工芸技術記録映画
35ミリ・カラー・29分

企画　文化庁　製作　桜映画社

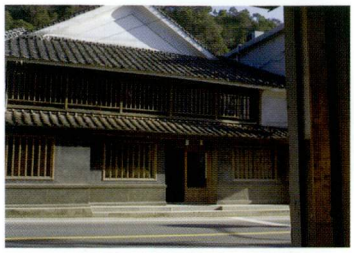
この映画は、国の重要無形文化財に指定された工芸技術「色鍋島」の記録である。文様、色彩ともに優雅な趣をたたえる色鍋島は、多くの工程が、統一性のある見事な分業によって練り上げられ、元禄から享保期に完成された。まさに、江戸の工芸技術の粋を示すものである。「手わざでつながる技術は、一度絶えると二度と戻らない」といわれるが、この優れた伝統技術を守ることの大切さを、映画は静かに訴えている。

色鍋島

いろなべしま

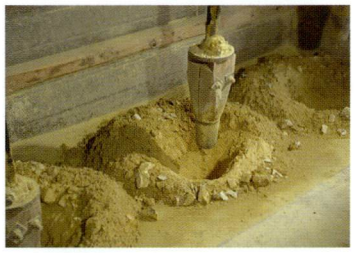
プロローグ

映画は元禄から享保期（1688～1736）に最盛期を迎えた色鍋島の作品紹介から始まり、それを生んだ九州・鍋島藩の窯跡を訪ねる。



有田赤絵町の今泉今右衛門家

その色絵の技術を、今に受け継ぐ今泉今右衛門の工房。

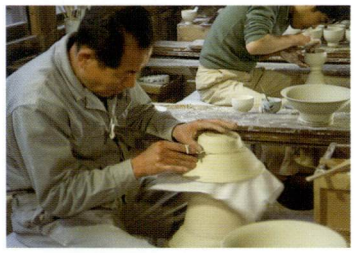


土の調製

陶器の原料は土であるが、磁器の原料は石である。
素地は、泉山陶石に、天草陶石を配合し、硬い石を砕いて土にする。

大皿の成形

色鍋島の代表的な形は高台のある大鉢（大皿）である。ロクロでの成形は、牛の舌と呼ばれる長い伸（のべ）ベラでひろげ、押（おし）ベラに代えて正しい形に仕上げる。



角皿の成形と変形皿の成形

角皿をつくる型打ちの技法と、変形皿をつくる糸切りの技法。

削り

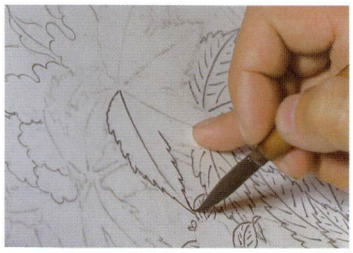
成形を終えた皿は、七分がた乾いたところで、削りの作業を行う。

水拭（ぬぐ）い

削り作業を終えると、器の表面を晒し布で、水拭いする。

仲だち

素焼きした大皿の上に仲だち紙をあて、椿の葉をこすりつけて文様を写す。

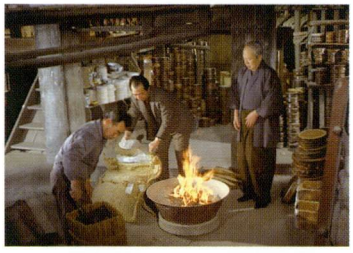


下絵付（染付）線描き

呉須で模様を線描きする。昔から、線描きは男の仕事であった。

下絵付（染付）濃（だ）み

次に、線描きした内側を、太い濃み筆で塗っていく。これは女の仕事である。どの工程をみても、職人の手と道具が一体になった手仕事の息づかいが感じられる。



釉薬の調製

色鍋島の地肌の美しさは柞灰釉（いすばいゆう）から生まれる。鹿児島県大隅半島に繁茂している柞（いす）の木の皮を灰にして、その柞灰釉を、長石などから調製した釉薬と調合する。

窯詰め

本焼きの窯詰めは大事な仕事であるから、窯元が先に立って積む位置を決める。

本窯焼成

陶工たちがいちばん緊張するのはこの本窯で、焼成は約40時間、焼成温度は1300度を超える。

窯出し

火を止めて3日後、窯の冷却を待って窯出しが行われる。鮮やかに下絵の染付が発色している。

色鍋島

いろなべしま

上絵具の精製

色鍋島に用いる上絵具の精製には今泉家だけに伝わるタテワケの技法がある。昔は赤絵の秘密を守るため家督相続は厳しくきめられ、今日まで一子相伝の形で伝承されてきた。

絵具の摺（す）り合わせ

上絵具は摺れば摺るほどよい。上絵（赤絵）の絵書座（えかきざ）の職人たちにとって、絵具の摺り合わせは、日に何遍も繰り返す、長時間つづく大切な仕事である。

上絵付（赤絵）

赤絵も男の線描きから始まる。ことさらに筆意を強めず、気品を込める。そして次の赤絵の濃（だ）みは、女の仕事である。各工程とも高度な熟練の技術を要し、寸分の狂いのない、きびしいチームワークの作業になる。

毛描き

赤濃みやぼかしの上に描く毛描き。

赤絵窯焼成と完成作品

赤絵窯に入れ、約800℃で7～8時間焼き、作品を完成させる。

製作スタッフ

脚本・監督　村山英治
撮影　木塚誠一
照明　山根秀一
編集　長谷川宜人
音楽　長沢勝俊
解説　観世栄夫